



グリーン・マン逮捕の瞬間(予定)

からす新聞はあらゆるテロを許しません

第6巻第9号
通巻第69号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社


からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

愚かで傲慢な日本政府のこんこんちぎたちの手口があまりにも不愉快だったため、昨年の七月、私は抗議の禁煙を始めたのであった。御存知の方も少なくあるまい。自分勝手な連中を代表してそれなりのポストにあるものが謝罪か御礼を申し述べに来るまでは、断固として煙草は吸わない、という決意で臨んだのである。残念ながら、今日に至るまで、国からの連絡と言えば、税金や年金の支払いに関するものばかり。私の抗議など毫も意に介するものではないようだ。当たり前か。おかげで、幸か不幸か禁煙は続き、家族には極めて好評である。医者にも少しは誉められている(と期待する)。

喫煙を止めると、めきめきめき健康になつていく自分を体感できるのかもな、などと幾許は期待していたのだが、諸君、何も実感など湧きませんのであるぞよ。良いことは実感できないのに、禁断症状で少なからず苦しむことになる。人によって区々なようだが、私の場合、兎にも角にも、眠くて眠くて、眠くて眠くて、眠くて眠くて様々な活動が著しく停滞した。尤も、そんなことが世間には何らかの影響を与えるはずなどない。何てこともなく日々は過ぎて、そのうちに禁断症状はすっかり治まっていた。

今日の紙面から

- 二面 建築面) バレンシアの場所
- 四面 からすライブラリー) U.D 『CE-5』
- 本 『フニーツー』
- 『LMMAC Festival』
- 六面(ロンドン・レポート) 『21世紀の』
- 七面(語面) 通訳の顛末

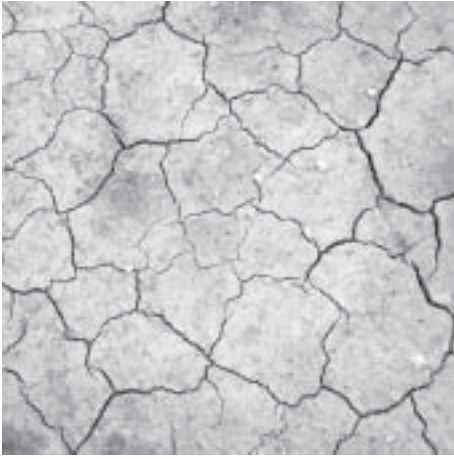


弟は私に先立つて数年前から煙草を断っている。禁煙するてえと何か変わるのかい、なんて話題になるのは当たり前。別に特に良いってことはないね、少なくとも、体感できるようなことはない……そんな彼の返答。そうそう、禁煙して暫くすると頭が痒くなったんだよなあ、なんて、とぼけたことを付け加える。馬鹿なことを言いなさんな。禁煙して頭が痒くなって堪るかい、あつはつは。はつはつは。そんな長閑な家族団欒の一齣。

ところが、我が弟の言は冗談などではなかったのである。何たることか、私の頭も痒くなり始めたのであった。間断なく痒いというわけではないのだが、何となく痒い。ふと気がつくとな手も多かるうけれど、本当に本当の話である。遣伝というのは意外なところで力を發揮するものなのだ。かなりの重喫煙者であった父も短期間禁煙したことがあった。あの当時、彼の頭も痒くなったのだろうか。大いに気になるところだ。しかしながら、今はこの世の人ではない。あちらの世界で巡り合うことがあったら、是非、尋ねてみたい事柄の一つ。

佐藤兄弟、揃って頭が痒いの図。思い浮かべ(最終面に続く)

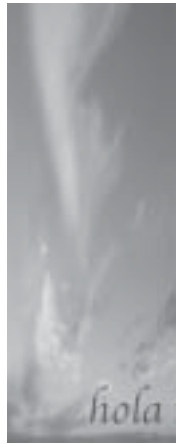
からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



畑

畑に水がみちびかれていた。どこからともなく白い二匹の猫があらわれて、私たちのあとをずっとついてきた。もう一匹の茶色い猫と一緒に、恐ろしく水路を土手から覗いてみたり、畑を浸しゆく水に触れてみたり。高く伸びた草むらでかくれんぼしたり、じゃれあったり。遠くのほうにいたかかと思つと、いつのまにか、すぐ近くにあらわれて、五メートル位の後ろについてくる。

畑の土は、輪作、休耕により、十分な栄養を蓄えている。きれいな畝には、新たな作物の芽が吹き、土の中には、微生物たちが、成分の分解と合成を繰り返して、良い土をつくり出している。水が干あがった畑の土は、美しい割れ目の模様をつくっていた。こんな模様、久しく見たことがなかった。懐かしい気持ちに浸る。



バレンシアの場所

イチジク

近所のひとびとは、夕方になり暑さも落ち着くと、散歩にでてくる。三人四人と連れ立って、農地の周りをぶらぶらと歩く。水路の際に、オレンジやイチジクの樹木が木陰をつくり、たくさん実が実っている。降注ぐ日差しを十分に吸収した実は、甘くみずみずしい。他人の土地の果物も、自由にもいよいよことになっていくと聞いた。昔、バレンシアでは、街路や水路に沿って、多くのオレンジの樹が植えられた。誰もが自由にそれを採って食べていた。家々にはパテイオとよばれる中庭があり、そこには必ずオレンジの樹が植えられていたという。アダムとイブのような男女が、その実をもちいで食べたらしい。





水路(左は系統図)



黒板
 農地に水を分配する方法は、アラブ人がこの地を支配していたころから変わっていない。水を欲しい人は、その日の朝、はずれにある集会所の黒板に、その旨を書き込む。話し合いによって分配を受ける畑が決まったら、張巡らされた水路に、いくつもある堰を手で上げ下げして、水の流れを変える。まことに原始的な木製の堰なのだ。畑に流れ込む水が、畝の間を一方方向に流れるように、堰は水路の片側だけに連なっている。水路を俯瞰すると、その模様は抽象的な幾何学を描く。



ひろがりゆく

多くの農地と水路の機構を残したまま、高齢者のための三百戸あまりの集合住居をつくることになった。この土地は敷地と呼ばれるけれど、今何もない、これから行われる行為を期待する類の土地ではない。ここには、すでに長い時間を経てつくられた一連の場所があるのだ。この土地の系はできあがっている。

建築とは破壊することだと言った人がいるけれど、このような豊かな土地を目前にすると、果たしてそうかもしれないと思う。建築することがクリエーションであるなら、その結果を目前に示さなければいけない。そうこうしているうち、長い晩夏の日も暮れかかり、うす赤紫の空が透明度を増してくる。あたり一面美しい空気の色につつまれる。

(篠崎健一)





ヤンヒポの 人生バラ色

まだまだ残暑の残る九月の終わり、とある平日の麻布十番、バーガーショップにて薄いコーヒースーツを着ている。時刻は午後七時すこし前。待ち合わせの時間までにはタバコ一本分ぐらいた。

ある日の夕方のニュース特集で、結婚したい男性の涙ぐましい努力の数々が報道された。その中で、そういった結婚したいのだがそれに至らない男女の為のサービスの紹介があり、その一つにインターネットで会員を集め合コンをセッティングして手数料を稼いでいる企業の紹介があった。早い話、結婚を前提とした出会い系サイトといった所だろう。その中でも特色としては離婚歴の有る独身者へもクロスアップして、相手の離婚歴は問わない男女も集めている所だ。

ヤンヒポは早速、当該ホームページを見つけて調査に乗り出した。ざっとシステムを調査すると、男女とも単独で登録する場合と男性グループ、女性グループで登録するようになっており、登録すると男女それぞれコーナーに特定の項目、つまり年齢の範囲、簡単な職業、それに自己アピールの欄が一覧表示される事になる。同じように登録した異性がそれらを見て、良さそうだと思うグループなり、個人なりを見つけて、主催社に合コンセッティングの依頼をする。それを受けた主催社が相手のグループ代表者当りに合コン希望が入った旨を通知して、了承すれば成立となる。この段階でお互いの連絡先を知っているのは主催社だけという事になる。

この後は、主催社から合コン会場、通常は主



催社の提携レストランが指定され、合コン会費を事前に主催社へ振込めば手続き完了。後は当日指定された会場へ行き相手を探す。いわゆるブラインドレーの始まりとなる。因に、登録に費用は一切かからず、合コンが確定した際に食事代のみ振込むという形になる。食事代は一人大体五千円で飲み放題の所、主催社の手数料込みで六千五百円という感じ。この事から、主催社には一人千円から千五百円の手数料が収入として入っていると思われる。尚、念のため「合コン」とは、合同コンパニー(Company・カンパニー・交友)の略で、グループ単位のお見合いパーティーの事。

午後七時にあと数秒で届くという段になり、ヤンヒポ所有の日本でも一番小さな携帯電話が震えた。主は本日のパートナー、「セイちゃん」こと、越池誠二(仮名)からだ。待ち合わせ場所のバーガーショップが解らないらしい。手早く説明して到着を待つ。彼は四十七歳で未婚、流石に婚期を気にし出したアーティスト。職業柄、

三十代後半にしか見えず、いわゆるイケメン風のなりをしている。相手の解らない合コンには、最適のパートナーだろう。そもそも、本来は彼の為に企画したと言ってもイイぐらいな訳だし・・・。

合コンの会場はバーガーショップから歩いて二分程度の小洒落た創作和風レストラン。午後七時半からである。ほどなくしてセイちゃんが到着してコーヒースーツを片手に向いの席に座った。彼は合コンという体験があまり無いので、今日に至った経緯と、相手の容姿や性格が理想とかけ離れていた場合のブロックサインを決めておく。もし、合コン後も関係を続けたいと思った場合と、相手も二名なのでどちらを気に入ったかを早い段階に二人の間で解るように決めておくのだ。ただ、相手に悟られるのは大変力ツチョ悪いので、絶対悟られない方法を取る。この方法については企業秘密なので、悪しからず。

バーガーショップから会場のレストランまでは数分なので、開始五分前に出れば余裕で間に合うだろう。約二十分程窓際の席で通りを眺めながら雑談していた。このバーガーショップは地下鉄駅の出口前、麻布十番商店街の入り口にあたるので、待ち合わせ場所としてメジャーである。当然、我々以外にも待ち合わせしている輩が店内や通りにたむろしてい

Y. 1297	37-47	の目標です。会社の帰りにも一緒に飲みましょう！ 自分はずいぶんになり早7年、米国シニアで仕事に打込んできましたが、昨年日本に戻り、何事かを真剣に考えるようになりました。友人は、47歳という年齢にはまったく見えない結婚未経験者です。職業から女性に接する機会が多いのですが、多岐なため楽しい出会いがなく、仲良く寄り合っておりません。二人とも、ムツクスには気が通っていますので、悪い印象は与えないと思います。是非、新たな出会いをしましょう。
		外資系のブランドに勤めています。2人の職
		関西人の割にはシャイかもしれませんが、二人で仕事の話をすると楽しく

る。中には三十代と思いき女性の二人組などいて、全部が今回の相手ではないかと思えてくる。当然ながら、合コン相手もこの辺りで待ち合わせしていても全く不思議ではない。
合コン相手のプロフィールも多少は入っている。これは、合コン相手が我々のプロフィールを見て白羽の矢を立てたのと同様に、相手にも公開しているプロフィールがあるからだ。それによると、相手はグループで登録しており、男性側の人数に合わせて設定出来るらしい。なんでも、日本舞踊を趣味にしているグループで、本人等曰く容姿端麗だそう。それからすると、通りで待ち合わせをしていそう先輩の中にはその条件に当てはまる女性はいないようだ。容姿端麗とはほど遠いヤツに限って横断歩道の前に目立つ出で立ちで立っていたりする。セイちゃんとの会話で、もしあいつだったら洒落にゃないよな」という会話が出るのも無理からぬ話だろう。

さて時間も迫ってきたので、セイちゃんと一緒にバーガーショップを出て目指す会場に足を向けた。そのレストランも直ぐに見つかったのだが、やはり場所柄が妙にエキセントリックな内装で、ハイセンスを装ってはいるが、本物とはほど遠く質感を感じられない。いかにも作り物といった感じがにじみ出ている。とは言え、今回についてはレストランの雰囲気はあまり関係ないのでよしとする。店に入り指示された予約名を告げると、店員はさも了解しているかのような表情で、大きめの四角いテーブルが置いてある座敷席に案内された。合コン相手はまだ到着していない。時刻は午後七時二十七分だ。

さて、さて、どんな女性陣が到着するのやら・・・。

『CE-5 / Vic Thrill』



Circus clone Rrcords、2003年、FIG003CD

日中Vic Thrillな、いかにVic Thrillだぞ。
(全大)

変わりつつある時代のその渦中にあるんだ、というよう
な感觸 私にとって、それがもつとも強かったのは、七十
年代末からのパンク、ニュー・ウェイヴのムーブメント盛
んなりし頃。それ以前にも、変わり者のプロダクション・
ロックや、落とし所の不分明なクロスオーヴァー、よくわ
からないけど乗れてしまったレガエ、行き場を失ったフ
リージャズ、などなど、新しい音楽が生まれる現場の
一員であるような錯覚を持ったことはあるにはある。近頃
でも、音響派だのエレクトロニカだの、と、新しい人々
はいるわけだし、中には、確かに未来への萌芽がないとも
限らない。
けれども、実は、新しいか新しくないかなんてことを気
にする時代はとくに終わっているのである。音楽という
川は分岐を繰り返して繰り返して、ひとりひとりがオリジナ
ルだ、というよつな、そんな風。



『フラニーとゾーイ』

J. D. Salinger (野崎 孝 訳)

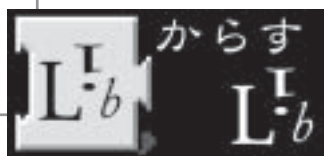
Franny and Zooey / J.D.Salinger

新潮文庫、1976年 ISBN4-10-205702-1 C0197



これは何回目になるのだろうか。それほど
同じ本を読み返す事はないのだが久しぶり
にこの本を読み返してみた。それは、意見
や思想に対する共感や同意といった物から
来る感動ではなく、きつとこの小説の登場
人物である家族が僕はたまらなく好きなの
である。年の離れた七人兄弟、全員これは
神童と言っラジオ番組に出演していたと言
う経歴を持つ子供達と両親。読み進めるう
ちに僕の想像力は刺激され、「考える」とい
う事を頭が始める。彼らが繰り広げる会話
にその「考える」は加速されていき、僕は彼
らのそれぞれの家族に対する、愛情をすつ
と感じていたのである。
どうして素晴らしい小説を読むと、居ても
立つてもいらなくなるのだろうか。見る
物が興味深く、美しく見え、何かをひたす
ら考え始めるのである。人は考えるのであ
る。感じて、考えて、夢を見るのだ。そこ
に寄り添う愛情と共に。

(神山)



MMAC FESTIVAL IN TOKYO 2004

Mixed Media Art Communication

9月7日 - 9月13日

セシオン杉並(東高円寺) / gallery 香染美術(南阿佐ヶ谷)

/ 360° + ParaGLOBE(東高円寺)

<http://members.jcom.home.ne.jp/mmac/index.html>



さまざまある「アート」がジャンルの垣根を超えて集まれば何が生ま
れるか。そんなコンセプトで毎年行われているイベント。絵画、映
像、音楽、彫刻、インスタレーション、ダンス、朗読、パフォーマンス
ス等々。海外からも多くのアーティストたちが参加し、個々の作品の
ほか、ワークショップなどを通して意気投合した者同士のコラボレ
ーションも披露された。
こう書くとは何か堅苦しい印象だが、実際はそうでもなく、特にパ
フォーマンスがなかなか面白く、可笑しかった。下着姿に袋一杯の小
魚を引きずって登場したカナダ人のマリーは、魚をべたべた身体中の
あちこちに貼りつけながら全身網タイツを足から着ていくという趣
向。くだらないんだがすごい美人が大まじめにやっていると、
笑っちゃった。マリーのパフォーマンスにうつつ、くせえ！を連発
していたニューヨーク在住自称詩人のダイアンおばさんは、ドイツ人
ミヒヤエルの演奏するミニマル・ミュージックに合わせて、アメリカ
の崩壊した家族の肖像を紡ぎだしつつ、ツクを連発。日本人だつ
て、人間の下半身の着ぐるみの股間から顔を出して、あー！呻きな
がらのたうち回っている。
アートの身近じゃん、と、コミュニケーションにもいろいろあるわ
なあと、そう思った9月11日だった。来年は前もって告知するので、
興味のある方はぜひ。

(望月)【7面に関連記事】

21世紀のこんにちは

パソコン雑誌をめぐっていると、こんな記事を見つけた。何でも、次のMacOSでは最大四人までのビデオチャット、音声と画像を使ったインターネット・チャットが可能だと言っ記事だった。今までチャットと言えばパソコンの画面上での文字での会話だったのが、いつの間にかそれにカメラが付くようになり画面上で文字で会話しながら相手の様子が目で見られるようになっていた。加えて僕は知らなかったのだが音声で利用でき、文字をキーボードで打たずに相手と声で会話できてしまうらしいのである。なんと驚きである。しかもお次は四人同時ふと、我に返ると同時に一つ疑問が上がった。

「これはテレビ電話なのか...?よみがえる記憶。僕は小さい頃漠然と、将来科学が進んだ際にはこの家庭にもテレビ電話が当たり前のようになり普及しているだろうと思っていた。それは「きつと車は空を飛んでいるだろう」という思いと同じぐらいに強く信じられていた気がする。それが電話その物に対するこのアイデアはあまり支持されずに、いつの間にかパソコンでのチャットが僕が思い描いていたテレビ電話のそれに相当するような物まで発展を遂げていた。何となく、今が21世紀なのだと思い返してしま

う瞬間。
ところで、それが全く同じ物なのかというところ、少し違う気がする。電話でのテレビ電話は飽く迄もその時、特定の人に用事があって使う物であり、チャットやビデオチャットのようにオンライン中の者同士が、手が空いているならば話をすると



た、よく学生時代に誰か暇な友

達は居るかたまり場に出向く時の様な、偶然的な期待がこもったものではないのである。もちろん、ビデオチャットを会議のような名目で使うこともでき、そういった意味では電話と同じようにその時、特定の人に向けて使う物に十分なるのだが、ここではそう言った使い方のチャットは柵に上げておくとして、僕はそのチャットの偶然的な形式が少し苦手なのだ。たとえば、自分がオンラインした時に誰が友達かいて、長話が始まったらどうしようかと心配してしまうのである。大抵パソコンに向かって何かをしている、又はパソコンのそばで何かをしている状態、オンラインするので、自分でオンラインしておきながら、こんな矛盾した心配が生まれてしまうのだ。に加えて、すぐ会話を切り上げたら相手に失礼かもしれないとか、友達がオンラインしている状態が見えるのに話しかけないのは悪いのかな、などと気をもむ種は尽きないのである。チャットが始まってしまえば、文字で会話していると言う利点からか、何かをしながらも何とかこなしてしまったりす

るのだが、それがビデオチャットなどといった物になってしまつと、もつとお手上げなのである。結局、自分で思っていたよりも僕は、物事を白か黒かにきつちりと別けてしまつタイプらしい。要するに、チャットにオンラインしたのなら暇であり、誰かお友達と無駄話をしたい状態であるべきだというような気持ちで働いてしまつのだ。最近はずいぶん慣れてきてはいるが、何かをしながらオンラインしておき、暇があれば誰かと話す、と言つた器用な事がおつづくに感じ、その内に使わなくなつてしまつのだ。そんな事があるからなのだろうか、新しいコミュニケーションの手段に何となく馴染めない自分を携帯電話に反発するおじさんに重ね合わせたりし、自分も古いタイプの人間だったのかと思わず疑つてみてしまつ。

先日、地元の草野球チームがホームページを開設したとのニュースが友達から届いた。メールでの連絡に加え、掲示板での連絡も盛んに行われていてなかなか活躍している。それに伴つて、地元の友達が何人かまとまってチャットをや

り始めるようになった。これはいかにパソコンとインターネットが普及しているという事にもつながるのだろうか。昔からよく知っている面子をチャットの画面に見るのはおかしく、不思議な感じがしてしまう。昔は駄菓子屋や公園を誰か居ないかと覗いていたのがゲームセンターに変わり、その内にパチンコ屋になったその次に、まさかインターネット上でそれを見るとは正直考えもしなかった。時は進んでいるのである。その内に車が空を飛ぶようになるのだろうか。調度、旅行中の母から葉書が一枚届いた。ゆつくりとした調子の、相手の状況と心境が伝わる、短く簡潔な文章で愛情とともに暖かみを感じられた。たとえば、いつでも何処でも離れた誰かと顔を見ながらおしゃべりができ、車が空を飛んでいるような時代に、そんな手紙を書ける人間が沢山いたら素敵ではないだろうか。僕は、そんな手紙が書けるようになりたい。

(神山)

ストーカーバスター

相談無料
秘密厳守



produced by
P.D.Agency

tora@pda.co.jp
4-3-49-1 Narita-Higashi Suginami-ku
Tokyo Japan Zip:166-0015
voice : +81-3-5347-9063
facsimile : +81-3-5347-9064

多国籍アートイベントにおける

通訳の顛末

ライブラリで紹介したMMAC FESTIVALに、私は「国の際、メディアの際でいま何が」と題されたトークショーに通訳のボランティアとして呼ばれたのだった。通訳なんてやったことなかったが、面白そうだったので行ってみた。(望月)

オープニング・パーティ

9月6日。オープニング・パーティが行われると聞いて、どんな話になるのか少しでも聞いておかねばなるまいと思い、駆けつけた。隣り合わせたのが、髭面で恰幅のいい中年ポーランド人パフォーマンス・アーティスト、マーチン。手始めに「ポーランドは今度EUのメンバーになったんですね」と振ってみると、「待ち望んでいた。知ってるか。我が国の歴史は隣人たちによる搾取の歴史だ。……、ロシア……ドイツ……オーストリア……、」

止まらない。

「……分割、占領、国そのものが消滅……。そんな歴史にピリオドだ！」

今だ！

「で、トークショーではどんな話を？テーマは「What's happening on the edge of a country, on the edge of a medium」なんだけど」

「それはいつだ」

「11日、土曜日」

「おお、私は金曜日に帰国するのだ」

「まじで？」

結局その後もマーチンと話し込んでしまい、ショーの参加者たちとは話せず。お土産にポーランド語を覚えてもらった。

「ジェンクイン(Dziękuję)！サンキューだ」

初日

9月11日。そんなわけで何の準備もなしに臨んだ当日。企画では、アーティストたちだけでなくお客さんにも参加してもらって、いろいろ話そうということだったが、フタを開けてみると客はほとんどおらず、けっきょく当事者ばかりでのミーティングであった。後で聞いたことだが、宣伝をほとんどしていないらしく、そんじゃあしかたない。

参加者は日、中、韓、米、独、仏、加、そしてマーチンとは別のポーランド人。車座になってみんな好き勝手なことを言い合うのだが、いちいち私の下手な通訳が入るので、話は盛り上がらない。通訳するのにいちいち訳語を吟味して選んでる暇はないので、誤訳も多いし。

たとえば、作品についての説明は必要か、否かというような話題。一方がオーディエンスとのコミュニケーションとしてある程度の説明や解説は必要だと言えば、一方はただ自由に感じればよいと反論する。後者にさらに反論してある日本人がこう言った。

「あなたの主張はちょっと無責任のようにも感じるんですが」

出た。日本人得意の婉曲(ぼかし)表現。「ちょっと」に「ように+も」おまけに「感じるんですが」ときた。こういうのは得意だよ。そこでこんなふうに通訳。

“ It seems that your assertion could sound a bit irresponsible. ”

[直訳]あなたの主張はちょっと無責任に聞こえるかもしれないように思えます」

しかし現実：こんな遠回しな言い方をまともに理解してくれる国民は少ない。参加者の中では唯一韓国人のおねえちゃんだけみたい。にっこり微笑んでくれる。あなたと今度マッコリ飲みたい。でも、そうだよな、こんな言い方は嫌みを言うときにしか使わない国の人の人が多いんだって。

それにアサーション？いかにも受験英語って感じ(私は塾講師である)。assertionという単語を知っていたのは参加者の中ではたぶんアメリカ人とドイツ人だけで、おまけに私の発音の問題もある。イレスボンシブルにしたって、知ってても聞き取れなかったのかも。教訓：多国籍軍内部の情報交換においてはなるべく平易な表現を心がけるべし。

ありゃ、やべえ、やっぱみんなよくわかんねえって顔だ。言い直さなきゃ。

“ What you've been talkin'... Well... Are you responsible for it? ”

「あなたの言ってること、、、えっと、、、あなた(自分の言ってることに)責任もってますか？」

“ Of course! ”

「もちろん！」

ああ、なんか怒ってるよ……。

こうやって深みにはまっていくのである。

アメリカ人アーティスト

アメリカ映画で舞台はヨーロッパなのにみんな英語でしゃべってる。なんか釈然としないが仕方あるまい。アメリカは世界の中心なんだから。多くのアメリカ人は善くも悪くもそう思ってるし、確かにそりゃある意味事実。

で、アメリカ人と話してみる。面白いんだけど、彼らはネイティブじゃない相手に合わせてスローダウンすることをしない。いや、そりゃ言い過ぎか。スローにしてくれと言えば、瞬間、ゆっくり話してくれる。しかし、程なくして元のペースに。

ライブラリで紹介した詩人のダイアンは、

“ You know, doomsday is coming. ”

「いい？終末は近いわよ」

の発言あたりから突然加速が始まりしばらくは独演。

ロード・オブ・ザ・リングを凌ぐ大河冒険物語を構想する二十歳の青年ブレンダン、なぜ自分が額に大根を括り付けてパフォーマンスを行わなければならないかを解説。生気の源であるその角(大根)を奪おうとするヴァンパイアとの抗争を、だからゆっくりしゃべってくれて言ってるのに、熱く語るのだった。

中国人アーティスト

9月12日。トークショー2日目は、ピエトロ工房の今野雄一氏を招いて「中国の現代アート」。お客さんもそこそこ集まり、中国からは彫刻やインスタレーションを手がける3人が参加。彼ら3人とも英語がほとんど話せないの、日中間の通訳がまずいて、私の仕事はそれを話を聞きに来た欧米のアーティストたちに通訳することであった。

(最終面に続く)

(七面から続く)

作品の写真を見せながら、やはり当局からの規制が多いことや、それがアーティストたちの海外流出を招いていること、日本人に似て彼らの憧れはヨーロッパにあること、一方で政府はお眼鏡にかなうアーティストたちを呼び寄せて官製エキジビションを開き、現代アートにも理解ある中国を演出しようとしていることなど、いろいろ興味深い話が聞けた。

それにしても中国人たちの話し好きと早口なこと。たとえば「政府の規制は実のところどんなですか?」の質問に、今野さんも通訳も客もそっちのけで熱い議論が始まる。

一方はあまり冒険をせず上海にとどまり、そろって美学校の先生になり、今やけっこう裕福な夫婦。「ふつうの裸婦の塑像でも文句言われることがあるんですよ」

他方はドイツに逃れ、前衛的な活動をしているという。「本物の死体を使った作品を公にしようとしたやつはどうなったんだ?」(以下、私の想像)

上海: もちろん捕まったさ。

独逸: それでいいのか、お前たち。

上海: 逃げてったやつに言われたかねえよっ。

独逸: おまえらカネだけかっ。

(以上、終わり)

通訳が何とかまとめようとするが、火に油。上海の奥さんが途中で我に返ったらしく、

They're on fire.

「火がついてるわね」

そんな、わかっとなりますがな。

アーティストたちはみな自己主張の強い人たち。彼らだけをとって国民性を語るわけにはいかないが、中国がいまエネルギーが満ちているのは実感した。やっぱりアメリカの次は中国の時代なのかな。

打ち上げ

日本人の奥さんをもらって両国を行き来する陽気なポーランド人シュメックは、どうやら祖国のEU入りにそれほど感慨はない模様。人生いろいろである。彼からは、ポーランド語で「さよなら」は「ド・ヴィゼーニャ(Do widzenia)」と教わった。



(一面から続く)

ると、なかなか滑稽で悪くはない。些か間(いさ)の抜けた、それなりにユーモラスなエピソードだと言えるかもしれない。また、遺伝は声や体形が似る、というだけでなく、目に見えないところでも大いに影響しているのだ、という、ちょっとびつくりしたね、という話でもある。けれど、笑いや遺伝の話題としてではなく、恐ろしい話としてこれを語ろうと、私は書き始めたのであった。

当初、弟が禁煙すると頭が痒くなる、と言ったとき、家族みんなが、そんな馬鹿な、と笑った。しかしながら、数年後、私にも同様の現象が発生すると、禁煙すると頭が痒くなる、というのは、馬鹿な話どころか結構普通の話なんだね、と佐藤家では思われるようになった。よくよく考えると、これは怖い話である。いや、この一連の流れ自体が恐ろしいのではなく、以前も今も、それぞれの時点において、各々の事象

が半ば当たり前前のこととして家族内では扱われていることである。勝手に思い込んでいるだけで、実は、世間では全く通じることなどない非常識でしかない可能性がある。何しろ、当初否定していたときのサンプルと言えればわずが一例だったのだし、その後、家族内で常識と化すことになったのは、それが二例になったから、というだけのこと。勿論、佐藤兄弟の頭が痒がるうがなかるうが、当人たち以外にとっては、大した問題ではない。それでも恐ろしいのは、わずかなサンプルと何とはなしの雰囲気と非常識と常識が入れ替わってしまったこと。話題自体がどうでもいいものではあるし、そもそも全ての事柄に合理的な証明や信頼に足る統計を持ち込む必要はない。けれども、佐藤兄弟の頭の痒みは、俺たちって何だかんだとオテツナイデ妄信していることも少なくないのかもな、と懸念させるのである。

オー・モレーツな高度成長時代ほどではない

にせよ、日本という社会は、勤勉を好み、立ち止まってぶらぶらしている人間を認めたらならない。一億何千万もの人間が前へ前へと行進していく様子を想像してほしい。先頭を見てみれば、裸の王様が感動したのだ。改革は進んでいる。だのと掛け声ばかりが勇ましく、髪形ばかりが獅子奮迅(ししけん) あなただつて、ややもするとこの馬鹿げた大行進の一員なのかもしれない。私の頭の痒みがそう申しております。

みんなで進むのは結構。しかし、時には立ち止まって考えることが必要なのだ。流れに逆らうことになるうとも。気がついたときには、時、既に遅し、なんてことのないように。

さて、禁煙すると本当に頭は痒くなるのか否か。ま、これは立ち止まって考えるほどのことではあるまいが。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice: +81-3-3220-0644
Facsimile: +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第六巻第九号、通巻第六九号、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇四年十月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾
ファミマ
中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451
宝仙寺
ファミマ
おうめかいどう
中野板上駅